

ソ連の海洋調査船ビチャージ号を見て

佐藤良昭

去る12月中旬 夏以来の南太平洋海域における海洋調査を終ったソビエト科学アカデミー海洋研究所所属の調査船ビチャージ号が 隊長以下39人の観測隊員（うち10数名の女性科学者を含む）と共に ウラジオストックへ帰航の途中 東京港に立寄った。同船は 1939年にドイツから捕獲したものとのことであり 排水量 5,500トン 長さ 109m 3,000馬力 速力 14ノットの機関を持つ世界でも有数の大型海洋調査船である。

船上には おのおの 10m² 前後の物理 化学 光学 気象 地質 生物 などの諸研究室があり 深度 700m まで観察可能の水中テレビ（写真参照）水塊の光学性を観測する装置 日記海流計 音響測深器（写真参照）その他の観測器具が完備されており また とくに深海の採泥採水 生物採取に必要ないろいろの設備を持っている。

隊員達は 太平洋の深さ 5,500m の海底から 長さ 11~12cm の鮫の歯の化石を多数発見し また中部太平洋の赤道付近においては 最大の厚さが 500m にも達する柔らかい堆積物の層を測定したとのことである。

12月14日午後には 東京教育大学において 隊員フィラトヴァ博士による 太平洋の深海動物群 リシチン博士の 太平洋の現世堆積物 ウジンチェフ博士の 太平洋の構造 の3講演が行なわれた。

これらの報告では 現在帰航途中にあるため研究成果の結論的なことは聞かれなかったが ウジンチェフ博士により私たちがよく地図でみる 日本列島の東側にそった日本海溝は決して1つの細長いものではなく 北から雁行する3つの海溝にわかれるということ また一般に知られている太平洋の海深図は大いに改めなければなら

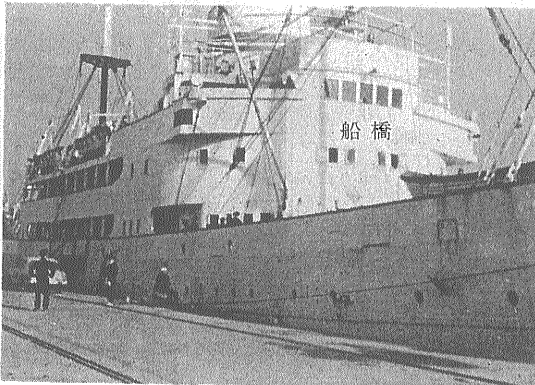
ないことが指摘され さらに同博士はかたわらのやや古い世界地図を指さして この太平洋の海深図は大変違っているといわれたのには聴講者一同大笑いであった。

フィラトヴァ博士は女性海洋学者として過去10数年非常にアクティブな仕事をされているが 前に述べた海洋底から産出する 鮫の歯の化石にマンガンフィルムのあることや 水面下 6,000m から 11,000m の間の超深海帯における底棲動物の分布について話をされた。

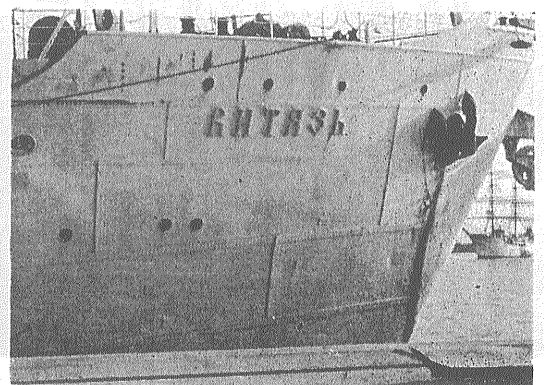
リシチン博士の講演は 海底の底質分布には法則性があり 大陸からの供給物質によって 地球上の最近の地史を考察する有力な手掛かりが得られること また太平洋の中央部では化学的に風化した地帯があり アルゴン法その他を用いて その形成年代を推定することも可能であることを説明された。ウジンチェフ博士は 海底地形を研究するための種々の方法 たとえば音響測深その他を説明され さらに海底堆積物の研究について 化学分析・花粉分析その他の結果の一部を紹介された。

わが国でも 最近ようやく気象庁の観測船 凌風丸による日本海溝の調査が行なわれるようになってはきたが島国である日本の近海を すでに来日したアメリカの調査船ベアード号や今回のソビエトの調査船ビチャージ号などの外国船によって大規模に調査されている現状をみる時 科学の発展のためには喜ぶべきことであるが 日本人としてはまことに残念なことである。さまざまな鉱産・水産資源を含み 気候に大きな影響をおよぼし地球の歴史を明らかにする上にも重要な役割を果す海洋・海底に対し 私たちはもっともっと大きな関心を抱くべきであろう。

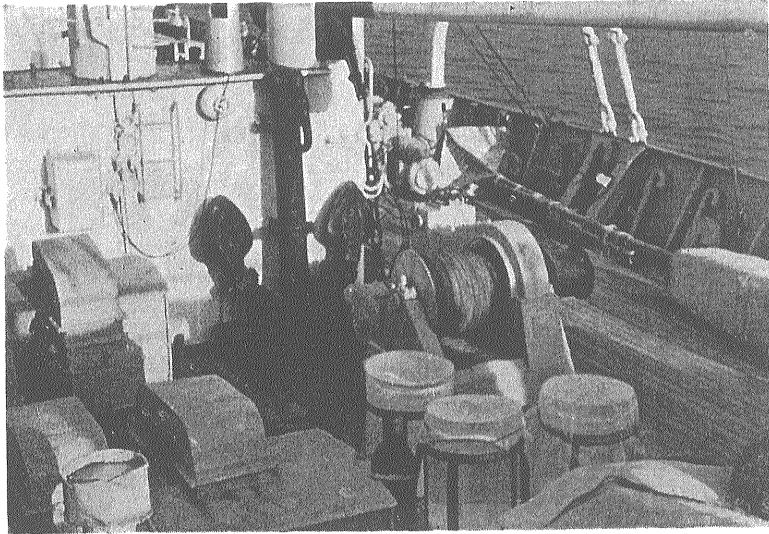
（筆者は燃料部石炭課）



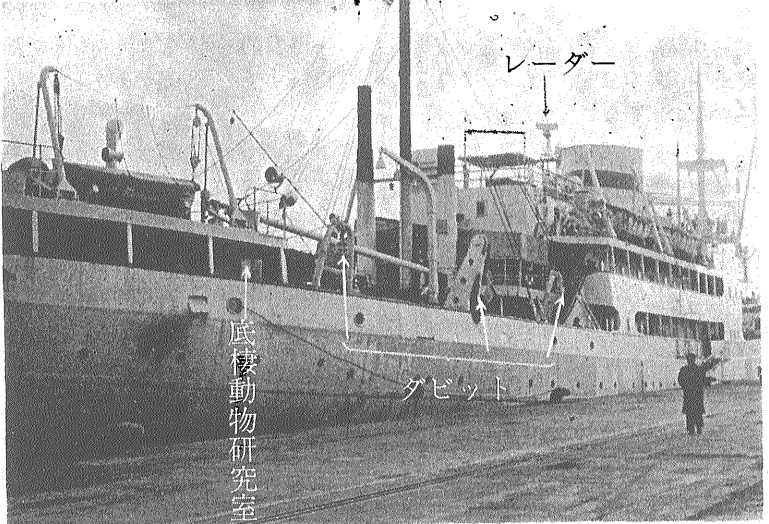
ソ連海洋調査船ビチャージ号



ビチャージ号の船首



← 前甲板には各種の調査器機が備えつけられてある

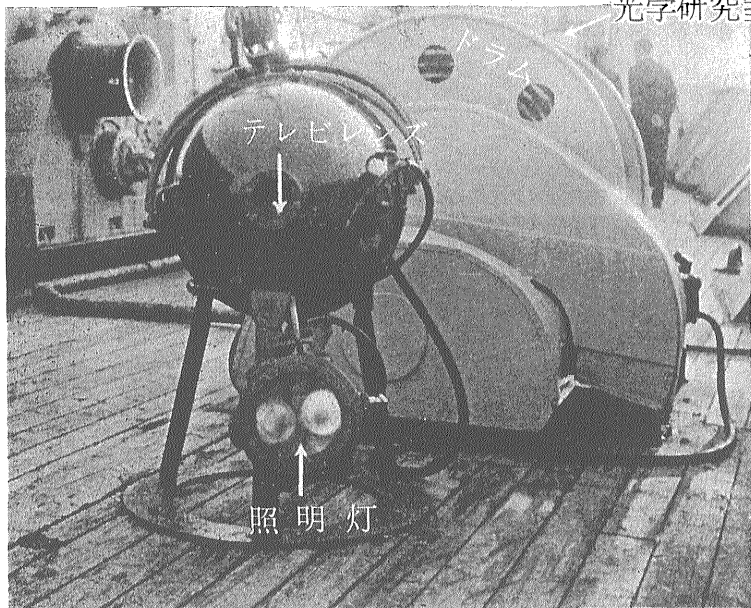


→ 後部甲板
ダビット……採泥やトロールの器具を上げ下げする道具

レーダー

底棲動物研究室

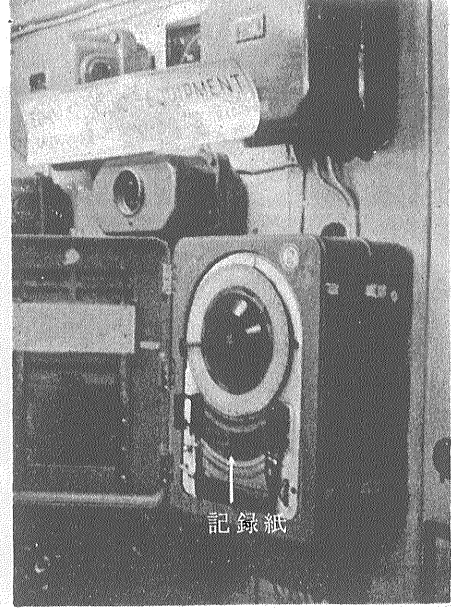
ダビット



光学研究室

テレビレンズ

照明灯



記録紙

前甲板にある水中テレビ（水深700mまで観察できる）受像機は船内の光学研究室にある

地質研究室にある音響測深器